

## 原題 「海軍の伝統と反省」

原文はB5判28ページ(ページ番号なし)

以下、原文をそのままA4判に変換し、欄外にページを付与したもの

### 海軍の伝統と反省

時の流れは誠に早く、海軍は勿論海上自衛隊創設時代を体験した人も少なくなつた。そこで今のうちに、海軍の伝統の光と影、特に光の面は私自身も長く強調してきたところであるが、影の面についてもよく後輩諸君に言い残し、再び同じ過ちを犯さぬよう自らを戒める資にして貰いたい、というのが今日の話の趣旨である。もっとも私が兵学校の生徒であったとき、ある教官から、伝統とは受け継ぐべき良いことだけを言い、伝えられてきた良くないこと或いは受け継ぐべきでない悪いことは、伝統とは言わず陋習と言うのだと、教えられたことが未だに頭に残っていて、影の面に伝統という言葉を使うことには私自身抵抗があるが、今日は話を単純にするため両者合わせて伝統と言うことにする。

海上自衛隊も創設以来五十年を越え、その間自らの伝統も確立され、今更海軍の伝統でもないように思われる。しかしその海上自衛隊の伝統なるものは、海軍の伝統を受け継いで新しい時代に応じるよう発展させてきたものであって、基盤になっているのは海軍の伝統である。この事情は海上自衛隊創設当時の状況をみればよく分かるであろう。

海上自衛隊は創設時、まず白紙になって米海軍から学ぶことを基本方針とした。海上自衛隊の前身である海上警備隊創設の中心となったY委員会の議長山本善雄少将は、後日次のように回想している。「私たちは最初アメリカの艦を貰ってアメリカの兵器でやるんだから、前の日本海軍というもののしきたり等は一応忘れて、全部アメリカ流にやる、そしてこれをマスターした後に、振り返って日本海軍の良いところを採り入れて、さらに良いものを作ったらよいではないかという考えで、――」

ところがその米海軍は、供貸与した艦艇航空機及び装備兵器の取り扱いや整備のやり方は懇切に教えてくれても、その背後にある理念や考え方、或いは戦略、戦術思想や、組織、編成、制度さらには統率のあり方などは「日本海軍の良い前例があるのだから、自ら研究したらよい」というのが基本的な態度であった。当初は手探りであった戦術などについては、やがて関連の秘密保護法の制定に伴って、AP類も逐次供与され、共同訓練を通じて実地に演練されるようになったが、制度、組織や統率、さらには戦略等については「日本側の自主的な研究に期待す

る」という米側の態度は、一貫して変わらなかった。従って発足の当初から、まず米海軍に学ぶことを基本にしながら、要員の殆どが日本海軍の出身者であったことでもあり、制度、組織、人事、教育訓練、内務、業務運営など殆ど分野で、身に付いていた海軍の伝統体質の多くが、新しい時代に適応するよう検討を加えられつつも、海上自衛隊に採り入れられたのであった。

旧軍隊に関することは総て忌避する当時の強い一般的な風潮にも拘わらず、海上自衛隊が例外的であったのは、同じ日本人が同じ日本周辺海域を舞台として、同じ海上防衛という使命に任じる以上、そこに共通するものが多いのはむしろ当然であったためであるが、また日米海軍とも英海軍に範を採って育ったため、酷似しているところが多かったこと、言い換えれば日本海軍の伝統は国際的にも通用するものであったからでもある。

当時の実状を示すエピソードを二つ紹介しておこう。

昭和28年4月、後に防衛大学校となる保安大学校が開校、久里浜の仮校舎で第一期学生の教育が開始された。当時学生の訓育指導に直接当たった小隊指導官は、私が兵学校の教官時代生徒であった人たちが多かったのであるが、そのうちの一人が、横須賀にいた私のところに来て訴えた。「教官！！口惜しいですよ、私が君たちの先輩として、と言いかけると、学生は、私たちは指導官を先輩と思っておられませんと言うのですよー」やがて何年か経って、また防大の指導官になった一人が、今度は喜色満面で言ったことである。「あのころ私たちを先輩と思わないと言った連中が、小隊指導官になって防大に帰ってきていますが、その連中は私たちが言ったと同じことを言い、同じことをやって後輩を鍛えていますよ」

もう一つの話しも昭和37年頃のことである。ある海軍出身の高官が山梨勝之進先生に尋ねた。「防衛大学校出身の幹部自衛官の中には「われわれには、旧日本海軍の伝統や精神を継承していくというような気持ちは、さらさらない。全然別個のものを築き上げていこう、という情熱と信念に燃えているのだ」という所信を吐露するものが多いが、このことについてどのようにお考えになりますか」。この質問に対する山梨先生のお答えは次のとおりであった。「それはもっともな所信だ。旧海軍よりも立派で、しかも新しいものを作りたい、昔あった悪いことはやめたいというのは、もっともな事で至極結構なことである。ただしこの場合、次のようなことを考えなければいけない。それは、会社でも学校でも官庁でもあるいは家庭でも、実際は現在の組織というより、歴史が仕事をしているということだ。歴史が生きて動いて、歴史が仕事をしているということ、忘れてはならない。過日、練習艦隊が自衛艦4隻で、遠洋航海に出港していくときの糸乱れぬ腕前を拝見したが、ああいう”仕事”が出来るのは、10年20年の歴史ではなく、100年に近い歴史の中で、皆が作り上げた遺産があればこそである。つまり80年90年と諸先輩が営々として築き上げた遺産があり、その精神が生きて居ればこそ、立派な仕事が出来るのである。ところで、もっと良いものを作る

というのは結構であるが、夏生まれて夏死ぬ虫は、夏の暑いことしか知らないで、冬の寒いことは知らないのと同様に、若い幹部自衛官は、第二次大戦で現出した日本海軍の姿だけを見て、これが旧海軍全体の姿であると誤解し、旧海軍が100年に近い歴史を持っていることを、忘れているのではあるまいか。日本海軍は第二次大戦だけでなく、日清（この戦役で日本海軍はどの海軍もかつて経験しなかったような近代海戦の洗礼を受けた）日露、第一次大戦も、軍縮時代の苦しさも、経験してきているのである。このような日本海軍の歴史は、世界各国の海軍の歴史と比較してみても、些かも遜色がないと思う。そこでこのような日本海軍の歴史上の遺産を、海上自衛隊が継承していく立場にあるということを心得た上で、もっと良いもの、もっと新しいものを作っていかなければならない、という使命感を持つことは、極めて結構なことである」。以上が山梨先生のお答えである。日露戦争の前夜でも、一斉抜錨逐次出港などはまだとても出来ず、通常の編隊行動にも苦勞しながら、英海軍の見事な艦隊運用を仰ぎ見ていた日本海軍であり、その実状を具に体験して居られる先生であればこそ、歴史の試練を経て築き上げられた伝統の貴重な価値と、その重みをよく承知して、後輩に示されたお言葉と承る次第である。

これらのエピソードが示すように、旧軍嫌悪の一般的風潮のなかで、旧海軍とは全く別のものを作ると言われた海上自衛隊も、出来上がってみれば、形こそ違っても、その中身は脈々として、日本海軍の伝統を伝えるものとなり、今日に至っている。

平成3年ペルシャ湾掃海に、殆ど準備の余裕もなく派遣され、無事故で稼働率100%、任務を完遂した掃海部隊の落合指揮官が、帰国後どんなに若い人たちがよくやったかを語り、また海軍の伝統無くして、あれだけの成果は考えられなかった、と述べたことは極めて印象的であった。

それでは海上自衛隊に伝えられた日本海軍の伝統とは何か、簡単に言い尽くすことは出来ないが、思いつくだけでも、自らの分を守り、他の分を尊重する良識、任務完遂を目標に、斃れてもやまない意気込み、厳しい規律と両立する上下左右の愛情と相互信頼、紳士的で、公私のけじめがハッキリしていること、正しいと信じる意見は自由に述べられる雰囲気、しかもひとたび決定が下されれば、自分の意見に拘わらずその決定が成功するよう全力を尽くすこと、部隊中心、部隊優先の気風、ユーモアが通じ、虚飾のない人間関係、そして総てを通じて船乗りとしての躰が身に付いていること、などがその一端といえよう。

これらは、いわば海軍伝統の光の面であるが、一方その日本海軍は、やるべきでない戦争を阻止できず、多くの戦闘にも敗れ、その使命を全うできなかった。そしてその挙句、国家国民に塗炭の苦しみを負わせたのであって、敗戦に至る経過を通じ、戒めとすべき多くの影の面を見るのである。その多くは、日本海軍の伝統、体質によるものであるが、それはまた、日本人の民族性あるいは人間の

一般的に陥りやすい傾向にも、通じているように思われる。それゆえにこそ、再び繰り返されることのないよう、後輩諸君の注意を特に促しておく次第である。例えば後で詳しく触れるように、ミッドウエーの敗戦はそれまでの作戦があまりにも順調であったことによる驕りの気持ちによることが大きい。それは、ついこの間バブルの最中、エンパイアビルなどを買い占め、もはやアメリカから学ぶべきものはないと、豪語していた日本経済が、バブルがはじけるとともに、あっという間にしぼんだ状況に、よく似ていることである。

それでは、諸君に学んで欲しい、海軍として反省すべき教訓とは何か、私自身が考えているところを挙げてみたい。

第一に挙げたいのは、戦術面あるいはさらに狭い術科面に集中し、戦略的発想、特に国家戦略という着意が殆どなかったことである。

当時海軍大学校校長であった及川古志郎大將は、昭和18年高山岩男京都大学教授に対し、日本が海洋大国の米英両国を敵に回すようになった主因の一つは、「我が陸海軍が軍人を教育する場合、専ら戦闘技術の修練と研究に努力したことであった」と述懐し、戦争の基本ともいべき戦争哲学を「戦理学」と名付け、その研究を依頼した。同教授は後年、海軍はbattleを研究したが、warは研究しなかったと述べている。今日から見れば、そのbattleも、ごく狭い範囲にとどまっていたのである。

開戦時軍令部参謀であった佐藤毅大佐（後航空幕僚長）は、次のように回想している。「我が海軍の多年の対米作戦計画は、米艦隊の早期に渡洋来攻することを対象とし、漸減邀撃艦隊決戦主義に凝り固まり、人的物的軍備及び訓練その他万般に亘ってこれに偏重し、その他のことを疎かにしていた。これに対して米海軍否米国は、国家戦略として、日本が無資源の海洋国である最大弱点を衝くため、封鎖—海上交通破壊—によって生命線を断つこと、及び航空攻撃によって我が戦力、国力を完膚なきまでに粉碎することを大戦略にしていた。（中略）このような大誤算は、ロンドン条約以後対米艦船比率に拘泥し過ぎ、万事が戦術的事項に偏重し、広い視野に立った、戦略的判断、思考、計画を疎かにした結果に他ならない」

この二人が述べているように、日本海軍では、軍令部も海軍大学校も、勿論艦隊も、戦闘場面や戦闘技術の研究演練は真剣に行ったが、戦争様相の全体について、戦略的に考察し研究することは殆どなかった。勿論、さらに進んで、本当に対米戦は不可避であるのか、陸軍はソ連、海軍は米国をそれぞれ仮想敵国として、両者に備えるのが果たして適当か、日本はその負担に耐えられるのか、それがムリであれば、どうすればよいのかなどの、国家戦略の基本を研究することはなかったのである。第一次大戦によって国家総力戦が大きく浮かび上がったが、その教訓も施策に反映されとは考えられない。

海軍にそのような着眼が全くなかったわけではない。当時の国際環境の下で、日本が国家としての充実発展と国民の福祉の向上を図るには、日露戦争で獲得した満州における權益を中心として、中国に向かい発展する以外にはないと考えられていたのであるが、その発展は必然的にソ連とだけではなく、英米との摩擦を起こす。加藤友三郎が、ワシントン条約受諾に際し「金がなければ戦争は出来ぬ」「国防は国力に相当する武力を整ふると同時に国力を涵養し、一方外交手段により戦争を避けることが目下の時勢において国防の本義なりと信ず」と判断し、決意したことこそ、この国家戦略の基本を鋭く衝いたものであった。この基本に従えば、対中発展は、外国との正面衝突を起こさない範囲に留める、という国家の大方針が定めらるべきであるが、それが可能な情勢ではなかった。

そこで、その加藤が首相兼海相であったとき、改訂された国防方針には「我と衝突の可能性最大にして、且強力な国力と兵備を有する米国を目標として主として之に備へ」と述べられており、海軍として兵力整備の強力な推進のため米国を仮想敵国にしておくことを、有利とした一面も否定できないが、日米両国それぞれの対中政策がやがて両国の衝突に導く可能性を考えれば、日本海軍がその責任上米海軍に備えることは当然であった。しかしその米国とは国力上とても戦争は出来ない。そこに海軍の－そして日本の－苦悩とジレンマの根源があった。

加藤は、海軍軍備の目標は、米国と戦うためというよりは、彼をして戦ったら手強いと思わせ、理不尽な行動を阻止するにあると考えた。それは具体的には勝算五分の兵力であり、そのためには七割の兵力が必要と考えられたが、加藤にとって軍縮条約は、持てる国アメリカの軍備の上限を制限し、日本が追随可能な範囲に留めるもので、6割と7割の差は大局上問題になるものではなかった。

しかし、対米不戦の国家方針が示されない限り、有事に備えるのが、責任当局の責務である。金もなく、国力も不足し、必要とする物資の大半を米国に仰ぐ日本が、その米国を相手にして、どこから物資を入手するのか、備蓄資材の尽きない間の短期決戦が望ましいが、敵艦隊が来攻する時期も方法も総て主導権は相手にあり、短期戦を強いる手段は何もない。決戦に勝つ決め手はなく、仮に勝ったとしてもその後どうなるのか、それで戦争が終わる保障は全くない。戦争を終わらせるのは相手の戦意の阻喪に待つほかはないが、それを促す自主的な手段はない。このような解き得ない難問に直面したことが、日本海軍の思考を戦争より、戦略に、戦略より戦術に限定し、戦闘あるを知って戦争あるを知らない体質を育成する一因にもなったように思われる。加藤友三郎のような優れた洞察力と決断力を持った人物が、その後海軍になかったわけではないが、必要なとき、必要な職務に配されなかったのは、海軍だけでなく、日本にとっての不幸であった。

少し脱線するが、何故海軍が戦争を阻止できなかったかを見てみたい。開戦を決定したときの海軍大臣は嶋田繁太郎大将であるが、彼は戦後次のように回想している。

「海軍大臣に就任してまだ十日ばかりしか経たない身として研究十分であったとは言われないが、

\*案がここまで出来上がるまでには、下の方から上まで段々に十分に検討し尽くされたものに相違ない、

\*累次の連絡会議に臨んで軍令部総長や陸軍側の説明を聞いてみると状況誠にやむを得ないようだ

\*あのご聡明な伏見宮殿下でさえ既に諦めて居られるように拝する

\*ここに私が反対して海軍大臣を辞めれば内閣は潰れるであろう。そして適当な後継者を得ることが極めて困難で、この逼迫した時期に国家として洵に大きな損失だ。また大臣就任の際の伏見宮殿下の思し召しにも反することになり、恐懼に耐えない。

いろいろ考えてようやく決心が付き会議に臨んだ次第だ」

この回想を見て諸君はどんな感想を持つか、そして自分がその立場にあったらどうであつたらうか、状況中の人になって真剣に考えて貰いたい。

私は、国家の大事に臨む責任者として、自分の信念がなく、発想が官僚的で、枝葉末節に囚われ、国家存立の大局から、情勢を冷静に判断し、論理的に結論を求める態度に欠けているのではないか、と思う。

彼は敬神家であり、皇室に対し極めて忠実であつたが、それは本質的なものではなく、表面的なものにとどまったのではないかと思う。

16年11月30日、高松宮の進言により、天皇陛下が不安を抱かれ、永野軍令部総長と嶋田海軍大臣を召されて御下問があつた際、「物も人も共に十分の準備を整え——」と奉答し、ドイツが戦争をやめるとどうなるか、とのお尋ねに対し、例えドイツが手を引いても差し支えないと答え、長官以下将兵の士気旺盛なことを申し上げて、ご安心の様子に拝した、と回想している。開戦を直前に控え、今更戦争に不安があると奉答出来る時期でも立場でもないが、ひたすらご心配を掛けないよう糊塗するだけでなく、戦争の困難性と早期收拾の必要性についても、ご認識を頂くことが、本当に忠実である所以ではなかつたか。戦争中物資の状況について報告したとき、ご心配をかけないようメーキングしたのも、同じ発想である。

彼の前任者であつた及川古志郎大將は、その在任中逐次悪化する情勢に直面し、開戦を回避するのに努力した。しかし三国同盟にも南部仏印進駐にも賛成し、近衛内閣最後の会議に、避戦を明言せず、総理に一任した。これらはいずれも、陸軍との正面衝突を避けたためであつた。2. 26事件以後、この種クーデターあるいはテロの脅威が、当時の政治家に深刻な心理的圧迫を与えていたのは事実である。

(注)山本、古賀両長官の開戦に関する述懐

山本長官「勝算なき対外戦争は国を亡ぼす。今米国と戦争しても勝算はない、(中略)開戦をくい止めることは一度は出来る。しかしそれに続くクーデター

あるいは革命政権が戦争に突入するのは火を見るより明らかで、これを抑止する成算はどうしてもできない」

古賀長官「あのとき開戦を押さえれば内乱勃発は必至であつたろう。しかし歴史を見れば内乱で国の亡びたことはなく、国の亡びるのは外国との戦争である。だからあのとき要路の責任者は内乱を恐れず、断固として開戦を抑止すべきであつた」

しかし山本五十六次官が、遺書を書いて、あくまで三国同盟反対の所信を貫いたことと比較して、どちらが国の大事に任じる責任者の執るべき態度か、言うまでもないであろう。嶋田大將が、開戦時の時期に堀（悌吉）などが、海軍大臣として在任したとすれば、もっと適切に時局を処理したのではないか、と回想しているのは印象的である。

三国同盟と中国からの撤兵問題が、直接的には米国に利用されて、戦争の導火線となったのであるが、その危険を洞察したからこそ、米内、山本、井上のトリオは三国同盟を阻止したのであつた。

開戦の阻止に触れたついでに、他国の国民性を知ることの難しさを、述べておこう。対米戦には絶対反対であつた山本長官は、実施部隊の責任者として、作戦実施のやむなきに至って、真珠湾攻撃を行い、戦術的には大成功を収めたが、対米通告の遅れから、米国民の戦意高揚に利用され、戦略的には大失敗であつたと言われている。

山本長官の攻撃の狙いは「開戦劈頭敵主力艦隊ヲ猛撃撃破シテ、米国海軍及ビ米国民ヲシテ救フ可カラザル程度ニ其ノ志気ヲ阻喪セシムルコト」にあつたが、駐米大使館の怠慢によって相手に逆に利用されたというのが、今までの定説であり、私もそう考えていた。十数年前渡米したとき、退役した米海軍士官と懇談する機会があり、談たまたま真珠湾攻撃に及んで、私が、通告の不手際によって逆に利用されたと話したところ、彼は「それは違う、叩かれたら、即座に叩き返すのが米国民だ。通告の早い遅いは別問題。例え事前に通告があつたとしても、国民が一致して対日戦に立ち上がることは、同じであろう」と答えた。私は半信半疑であつたが、9.11のテロ事件に対する米国民の反応を見て、彼の言ったことに納得した。

当時山本長官ほど米国を知り、理解した人は、海軍でも少なかったが、その長官でも奇襲の第一撃によって、救うべからざる程度に士気を阻喪させられると考えたのであつた。

もう一つの例を話しておこう

外務大臣として、三国同盟を推進し、締結した松岡洋右は、13才で渡米して9年間滞在し、苦学して大学を出たのであるが、彼は自分ほど米国を知るものは居ないと自負し、「アメリカ人に対する行動の仕方としては、たとえ嚇かされたからといって、自分の立場が正しい場合に道を譲ったりしてはならない。そのた

めにもし殴られたら、直ぐその場で殴り返さなければいけない。一度屈服すれば二度と頭を上げることが出来ないからだ。対等の待遇を欲するものは、対等の行動で臨まなければならない」と言うのが常であった。

彼は日米開戦の日に「三国同盟の締結は僕の一生の不覚だった。――三国同盟はアメリカの参戦防止によって、世界戦争の再起を予防し、世界の平和を回復し、国家を泰山の易きに置くことを目的にしたのだが――」と述懐して、米国の考え方とその行動に対する自分の見通しが誤って、戦争に導いたことを悔いた。

アメリカ人にとって、ヒトラードイツは、建国の理念から俱に天を戴くことの出来ない相手である。そのドイツに日本が与したことは、日本もドイツ並の敵になったことを意味したのであった。アメリカを良く知っていると言っていた松岡は、この基本的な心理を洞察できなかったのである。

このように他国の国民性の理解やその行動の予測は難しい。我々は、関係する諸国の歴史や民族性に対する勉強を怠ってはならないが、いくら勉強しても限界のあることを認識し、謙虚に且つ柔軟に情勢に対処することが大切と思う。

この他国を理解するという事に関連して、一つのエピソードを紹介しておこう。海軍に国際法の権威として榎本書記官のいたことは良く知られているが、その後継者として、昭和初期に杉田書記官が採用され、直ちに3年間イギリス留学が命じられた。その時国際法の研究等の訓令を承けたが、阿保海軍大臣に挨拶に行ったところ、一番大事なことは、外国人というのはどういうものの考え方をするかを知ることだ。これだけをしっかりと勉強してこい、と言われた。そこで専ら外国人との交際に精を出した。杉田氏の述懐によると、彼が海軍で一番お役に立ったと思うのは終戦時のことであるとして、8月11日、会議を抜け出してきた米内大臣に呼ばれ、”EMPEROR IS SUBJECT TO SUPREME COMMANDER”という電報をみせられ、これで陛下のご地位は安泰か、即答せよと命じられ、「上に誰か来ると書いてあるが、陛下を除くとは書いて居ない。従ってご安泰と確信する」と答えた、とのことである。この杉田書記官の解釈が米内大臣の確固たる終戦努力に通じたものであろう。外国を理解するための海軍の隠れた努力として紹介しておく。

脱線したついでに海軍の政治力について触れてみたい。当時の政治力の根源は、統帥権の独立と、軍部大臣の現役大中将制にあったが、海軍は、これを使って、自らの目的を達成することもなく、また陸軍の暴走も阻止できなかった。もともと陸軍と違って、海軍には政治に興味をもったり、深入りする体質も伝統もなかったのである。今日は政治優先が確立し、当時のような軍の政治力とは無縁になったが、だから我々は政治に無関心でよいということではない。与えられた任務の目的を理解するためにも、海上防衛に対する政治の理解と支援を得るためにも、政治を勉強し、之を理解して、自らの見識を持つことは極めて重要である。それはまた我々の眼を狭い軍事面から、より広い世界に開き、任務達成上不可欠な素



養を養うことになるであろう。とかく我々は、海という自然と、艦艇、航空機、装備といった技術面の勉強に忙しく、これを扱う人間を学ぶことが疎かになりやすい。一方、政治の基本は、この人間の理解にある。海上自衛隊出身の政治家が、他自衛隊と比較して、甚だ少ないことも、この傾向を如実に示すものと言えよう。政治家を目指せと言うつもりは全くないが、政治に疎い弱点を自覚し、政治をよく理解するよう勉強することを勧めたい。

それでは本論に戻って戦略的発想を欠いたことを考えてみたい。航空機や潜水艦の進歩に伴い、それらの戦術的用法は良く研究されたが、それが戦争様相に及ぼす影響は、顧みられなかった。僅かに井上成美航空本部長が、昭和16年1月海軍大臣に提出した新軍備計画論は、まさに実際の戦争で示されたとおりの戦争様相を想定した画期的戦略に基づく軍備計画であったが、これが海軍全体の認識になることなく終わった。

また戦術論を越えた総合的な考えに乏しかったことは、日本海軍に海軍政策のなかったことにも示される。当時諸外国はそれぞれ海軍政策を公表し、使命の優先順序、それを達成するための基本的考え方、兵力整備の目標、後方支援の基準などを明らかにしていたが、日本海軍は、海軍政策を示したことがなく、兵力整備、人事、教育、補給、施設、研究開発などを貫く長期的な一貫した方針がなかったといえよう。

反省すべき重要な教訓と考える第二点は、目的意識が薄かったことである。海軍にこの意識が、もともとなかったわけではない。秋山真之が海軍大学校の教官をしていたときの海軍応用戦術の講義に、「オヨソ戦争モシクハ戦役ニオイテ對抗軍ノ直接ノ目的トスルトコロハ、一ニ敵ヲ屈スルニアリ、コノ目的ヲ達センガ為ニ取ルトコロノ手段多々アリテ、アルイハ敵ノ兵力ヲ殲滅シ、アルイハ敵ノ要地ヲ占領シ、アルイハ敵ノ兵資ヲ掠奪シ、アルイハ敵ノ交通ヲ遮断スル等ノ如キ、イズレモ敵ノ抵抗力ヲ減殺シテ、痛困ヲ感ゼシメ、遂ニ我ニ屈服スルノ已ムヲ得ザルニ至ラシメンガ為ナリ。コレラノ手段ヲ指シテ兵術上ニ於イテ作戦目的ト称ス。手段ヲ目的ト謂ウハ些カ奇ナリト雖モ、凡百ノ人事皆斯クノ如キモノニシテ、目的ヲ達センガ為ニ手段ヲ生ジ、手段ヲ遂行センガ為ニ又第二ノ目的ヲ生ジ、即チ第一ノ手段ガ第二ノ目的トナルモノナリ」とあり、まさに今日の目標の原則と同じ考え方が示されていたのである。

しかしこのような考え方は、やがて全く忘れ去られ、私が海軍にいたころは、典範類にも、教育訓練にも一言も触れたものはなかった。何故これが消えていったか、battle あってwar あるを知らず、邀撃艦隊決戦一本槍の海軍の体質、つまり極めて単純化された戦術、術科レベル以下の雰囲気では、このような考え方は重視されなくなったためであろうか。海戦要務令でも、意志の疎通と上司の意図の明示、あるいは協同とか任務とかいうことは重視されていたが、協同にせよ、意志の疎通にせよ、さらに任務にせよ、その中核となるべき目標系列

を通じて努力の指向を一貫するという着意はなかった。もっとも重視された任務についても、その目的、即ち任務を達成することによって、上司の何に貢献するのかということは考えられることなく、自明のこととして扱われた。

その結果ともいえようか、大東亜戦争の多くの海戦において、目的観念の不在、あるいは目標の不一致などが、作戦失敗の大きな原因になっているように思われる。

その好例が、ミッドウエー海戦である。山本長官の目的は敵空母部隊の早期撃滅にあり、これをおびき出す手段としてミッドウエーの攻略を企図したが、大海令では、ミッドウエー攻略を目的とし、南雲部隊では、主目的は敵艦隊の撃滅であることを連合艦隊司令部から再三強調されたにもかかわらず、ミッドウエーの占領に囚われて、戦機を逸し、惨敗を喫した。

第一次ソロモン海戦において、三川艦隊が警戒の敵水上艦を撃滅したにもかかわらず、上陸船団には一指も触れずに引き揚げたのも、レイテ海戦において、栗田部隊がレイテの湾口に近づきながら、幻の敵機動部隊を求めて反転したのも、良い例である。今日は詳しい話をする時間はないが、諸君自ら、何処が目的の不一致なのか、それは何故生じたか、そこから学ぶべき教訓は何か、状況中の人になって、考えて貰いたい。

海上自衛隊では創設以来使命という考え方が重視され、情勢判断でも、まず使命の分析から始まるようになっているので、同じ過ちを繰り返すことはないと思う。しかし諸君が日常の仕事をするときに、上司の命令であるとか、規則に定められているから、ということは考えても、それは何のためか、何の役に立つのかまで、考えが及ぶのは少ないのではなかろうか。

50年前、私が本校の学生であったとき、学生の間で、兵術の原則について討議したことがある。どんな場合でも無条件で適用できる原則というものはない。優勝劣敗は何時でも当てはまるが、これは原則ではなくて、定義の問題、むしろ公理と言うべきである。ただし、目的の原則だけは、何時如何なる場合でも適用出来るし、適用すべきものである。これが当時の学生の意見一致したところであった。

それで思い出したが、当時統率の教務で、海軍大学校以来の伝説的な寺本少将のお話を承った。伝えられたところでは、海軍大学校当時、まず最初の教務で、学生の一人一人に、徹底的に「何ノ用ゾ」と問い詰め、学生の既成概念をうち砕き、深く考え直させたという。「何のために本校に来たか」「高等の兵術を学んで、より良くご奉公するためです」「何ノ用ゾ」「御稜威を輝かせ、国民を守るためです」「何ノ用ゾ」「祖先以来の伝統を守り、且つ世界平和に貢献するためです」「何ノ用ゾ」大抵はこの辺で行き詰まる。諸君もやってみたら思索を深めるのによい訓練になると思うが、今日この話を紹介したのは、作戦はもとより、平素の業務を行うときでも、自らに「何ノ用ゾ」と問うて、目的の認識を忘れない習慣を養うよう勧めるためである。

次ぎに伝えておきたい教訓は、情報の重視と論理的思考である。海軍では情報が重視されず、そのため多くの面で失敗した。中央では軍令部第三部が情報担当であり、その中に戦争当時は四つの課があつて（5課が米国、6課が中国、7課が露、独、仏等欧州諸国 8課が英国と英連邦）優秀な人たちが、情報の収集、分析、評価を行い、立派な業績を上げていた。問題はその活用にあつた。作戦計画を所掌する第一部は、第三部の情報に基づいて計画を考えるのではなく、独自の見解によって計画を作っていたからである。

部隊には情報を担当する幕僚は居らず、通信参謀が情報資料を整理するのが精一杯であつた。連合艦隊に情報参謀が設けられたのも、昭和19年になってからで、それも通信参謀が情報の方が重要と考え、旗艦の通信長に通信参謀の仕事を任せ（後日専任者が発令された）自ら情報参謀と称してからである。そのためでもないであろうが、情報の入手に十分な配慮がされず、偵察、索敵、哨戒などが不十分で、ミッドウエー海戦で敵空母の発見が遅れ、あるいはトラックを奇襲されるなどの失敗を招いた。

情報教育を行うところはなく、諜報や防諜の観念も不十分であつた。暗号保全の着意も不十分で、ワシントン会議で暗号が解読され、大きな不利を招いたことが、公表されていたにも拘わらず、関心が足らず、開戦前の外交交渉や、ミッドウエー海戦、山本長官機の攻撃など、政戦略や戦術場面の重要なとき、暗号を解読されて、致命的な不利を招いたことは、諸君も良く承知しているであろう。

暗号が解読されているのではないか、という疑いがなかつたわけではない。しかし、担当者の解読されるはずはない、という強い意見によって、格別の処置はとられなかつた。担当者が自分の仕事に自信を持つことも重要であるが、それが独善になると、大きな災厄を招く。十分な自信の持てる立派な仕事をするとともに、他人の批判に対し、謙虚に反省し、検討する柔軟性が大切である。今日の衛星通信、インターネット時代の暗号がどういうものか、私には判らない。しかし暗号が全く不要の時代は来ないのではなかろうか。その暗号が必ず解読される運命にあることは、ネットに対する妨害、侵入、欺瞞等に対する対応とともに、十分留意して欲しい。

情報軽視にも結びついたと思われるのが、論理的に思索を進め、合理的に結論を求めることになじまず、直観に頼る日本人の習性である。私は決して直観を否定するものではない。数字的裏付けと経験によって養われた操艦の勘が本物であり、極めて有用である反面、そうでないのは山勘で、大きな失敗の原因になるように、稀には生まれつきあるいは修練によって優れた直観を発揮する人のあるのは事実である。しかし、多くは山勘のたぐいであつて、日本海軍も情報の不足と誤った直観によって、多くの失敗を重ねたのであつた。

この反省から、論理的判断力を養うことが、本校教育の一つの眼目とされたのであり、諸君もよく身につけて欲しい。

情報軽視とも関連するが、戦果確認が不十分であったことは、その後の作戦に多くの影響を与え、また正式発表に対する信頼を失わせることになった。台湾沖の航空戦がもっともよい例であるが、確認が困難で、錯誤の多い夜間航空攻撃の成果を、現場の報告を鵜呑みにし、翌日の偵察等の確認の手段を取らずあるいはこれを無視し、全般情勢の推移から大局的に評価判定しなかったこと、

(注)台湾沖港空戦の直後偵察機がルソン島東方に4隻の空母群2群を発見した。いくらアメリカでも無尽蔵に空母があるはずがないと考えつつ、これは沈めた空母とは別だということにして、辻褄を合わせたという。

また潜水艦を攻撃した成果も現場の報告だけに頼り、結局累計すると膨大な数になったことなどは、必ず確認の手段を講じ、あるいは裏付けを求めた米海軍と比較して、日本海軍の甘さが顕著である。

これらは、戦死者に対する配慮もあったが、論功行賞にとらわれた体質も一つの原因であり、上級司令部や中央の統率が誤っていたためではなかろうか。現場重視とは、机上ではなく現場の状況に即しその判断や意見を尊重することであって、決して甘やかすことではない。戦果の判定に当たっては、上級段階ほど、手段を尽くして情報を求め、厳しい評価を行い、現場部隊はその評価に服する隊風を確立すべきであろう。

次に申しておきたいことは、教訓の蓄積と活用である。米海軍は真珠湾攻撃直後空母中心に兵力整備を転換した。また第一次ソロモン海戦後、巡洋艦、駆逐艦の戦術を検討し、訓練を励行するなど、教訓の活用は見事であり、迅速であった。それと比較して、日本海軍の教訓の調査、整理、活用の態勢は誠にお粗末であった。ミッドウエー海戦後、“つつけば何処も穴だらけ”との理由で、戦訓の調査も研究会も実施されず、機動部隊は二段索敵の実施、空母応急対策など、身にしみた教訓を活かしたが、組織的に教訓を学び海軍全般で活用する着意のなかったことは、論外と言うべきであろう。これは機密保持が優先したためでもあるが、もともと海軍に戦訓を積極的に調査し活用する着意も態勢もなかったのである。

兵術的研究調査に任ずべき海軍大学校は解散同様に配員はなく、各術科学校も、術科面からの戦訓を、調査研究する配員はなかった。私は昭和18年の初め横鎮付でいたところ、航海学校長承命服務を命じられ、一月ほど、指導官付として、高等商船学校を出た予備士官の教育にあたった。指導官は運用科長、中佐の方で、教育と研究が本務であったが、部下には兵科将校は皆無で、この予備士官の教育を含め多くの雑務も、総て一人でさばかねばならなかった。当時応急は運用科の所掌であったので、応急に関する戦訓を調査研究し、その教訓や改善提案を部隊へ配布する責任も負っていたのである。配員を要求しても認められず、沈んだ駆逐艦の残務整理が終わって、次ぎの配置待ちであった私が、一月の約束で雑務処理の補佐に配された次第であった。それまでソロモン方面で、目の当たり敵の改

善進歩が早いことを痛感していた私は、これでは我が方の戦訓の活用が遅いのも無理はない、と思ったことであった。

海上自衛隊では、艦船、航空機等の事故防止に必要な参考資料の編纂配布を励行しているが、演習、訓練等の成果や教訓をどの程度整理蓄積し活用しているか、疑問がある。教訓を收拾、評価、整理、配布、活用する仕組みを、平素から確立しておく必要があるのではないか。

次に申し残したいことは、最初に触れた驕り症候群についてである。人間はとかくうまくいったときには思い上がり、まずいときには落ち込む傾向があるが、日本人はその幅が大きいのではなからうか。真珠湾攻撃の成功によって、国家総動員態勢のスタートが遅れたのもその一例である。海軍もその例外ではない。引き揚げてきたアメリカにいた駐在武官が、米海軍省の非常執務態勢に比べ、海軍省も軍令部も、定時出勤、定時退庁、平時そのままの執務状況に驚いたこと、イギリスにいた武官が、首脳部にイギリスを風前の灯火と見ているのは間違いであるとして、経済力、精神力、戦争指導等の実例を挙げて報告した際、多くは居眠りをしている反応がなかったことなどから、その一端が伺われる。

実施部隊の方も、真珠湾攻撃前の虎の尾を踏むような慎重さと、今度はミッドウエーだと呉の市民も知っていた油断の差は顕著である。確かにこのときは兵力も練度も遙かに敵に優っていた。暗号が解読されて、手の内を全部読まれていたが、まともに戦闘すれば決して負けることはあり得ないはずであった。良く知られていることであるが、その敗因のうち

\* 敵機動部隊が待ち受けているとは全く考えなかったこと。（潜水艦による哨戒線配備の遅れ）（杜撰な搜索計画とその形式的実施、敵空母存在の通信情報の不通達）（敵艦隊攻撃の為控置した航空機の陸上攻撃への転換）

（注）「敵の通信状況によれば、ミッドウエー-北東に母艦あり」という6Fから軍令部、連合艦隊宛の電報を東京から放送した。山本長官が機動部隊に知らせなくて良いかと念を押されたが、黒島前任参謀が当然受信しているからその必要はないと答えてそのままになった。機動部隊で受信していないはずはないが、首脳部には届いていない。要務処理の不適切のためと思われる。

\* 敵空母の存在を知ってからの緩慢な処置などは、まさに驕りが大きい要因であったと思われる。

山本長官は4月末第一段作戦の研究会席上で、「敵ノ軍備力ハ我ノ5ナイシ10倍ナリ、一常ニ敵ノ痛イトコロニ向カッテ猛烈ナ攻撃ヲ加ヘネバナラヌ、然ラザレバ不敗ノ態勢ナドハ持ツコトハ出来ヌ」と、厳しく油断、慢心を戒めた。しかし、ミッドウエー作戦前の図演で、統裁していた宇垣参謀長が、審判標準に基づく判定を我に有利なように変更するなど、司令部の幕僚自身が、思い上がりを免れておらず、それまで実際に戦果を挙げてきた機動部隊はもとよりであった。

この当時の装備や術力が素晴らしく、その格差を維持して全幅発揮して居れば、

戦争の経過も大きく変わったと思われるだけに、特に上級司令部の驕りと気の弛みが惜まれる。「神明ハ一勝ニ満足シテ治平ニ安スル者ヨリ直ニ之（勝利の栄冠）ヲ奪フ古人曰ク勝テ兜ノ緒ヲ締メヨト」との東郷長官の戒めは、日本海軍の隊風とはなっていなかった。

これ以上言うことはないであろう。人間の陥りやすい弱点であるだけに、諸君の自省自戒を祈る次第である。

次は攻撃と防御の考え方について触れたい。海戦要務令で「戦闘ノ要旨ハ攻勢ヲ取り、速ニ敵ヲ撃滅スルニアリ」と定められ、攻撃を最良の防御とし、先制と奇襲を金科玉条とする考えは、海軍に深く浸透し、作戦計画にも教育訓練にも総て適用されていた。攻撃重視の思想は、創設以来劣勢兵力を以て国防にあたる宿命に置かれた日本海軍としては、必然的とも言えようが、それが行き過ぎて防御軽視、さらには防御無視にまで至ると、多くの問題を生じる。

防御軽視の顕著な例としては、海上交通保護、沿岸及び港湾防備、防空、対潜、対機雷などに対する、中央当局や艦隊中枢部の無理解で冷淡な態度、あるいは艦艇、航空機の装備の偏向などが挙げられよう。レーダー開発の進言に対し、そのような消極的な防御兵器は、帝國海軍には不要であるとして、却下した軍令部の狭い硬直した見解、零戦や中攻には、搭乗員や燃料に対する防弾装置を欠き、ワンショトライターといわれて、多くの犠牲を出したこと、艦艇応急に対する関心と熱意を欠いたことなどは良く知られている。第一次大戦における英巡洋戦艦の脆弱性と独艦の強靱性の対比や、英国が敗北の淵まで追いつめられた海上交通保護の問題なども、良く報告されたが、施策に反映することは少なかった。

当局がこれら防御の重要性を知らなかったわけではない。限られた国力のなかでの優先順位を選択の問題ではあったが、極端に過ぎた面のあったこと、攻撃優先の中でも、関心さえあれば、もっと工夫の余地があったことは否定できない。

それではその重視された攻撃精神が、実際の戦闘で十分発揮されたか。勿論文字通り攻撃に徹して、成果を上げた例も多い反面、疑問のある行動も少なくない。私の体験したスラバヤ沖の海戦も一つの例である。主力である重巡戦隊は遠戦に終始し、突撃を命じられた水雷戦隊も、当時基準とされた5000メートルまで突進して魚雷を発射したのは、後に二階級特進された佐藤康夫司令率いる第9駆逐隊の二隻だけで、私の艦を含め他の十数隻は、9000メートルから1万メートルで発射した。戦果を挙げたのが第9護衛隊だけであったのは当然である。余談であるが、このとき「各隊反転」と報告する艦長に対し、司令は「艦長、後ろを見るな」と一喝されたという。

アッツ島の海戦もその例である。劣勢の敵をその根拠地から遮断するような良い態勢で会敵しながら、遠戦に終始して遂に逸したのであった。

平時の訓練では舷舷相摩すまで突撃したものであるが、実際に弾丸が飛んでくる実戦となると、そうはいかないのが人間の弱さである。この弱さを助長するよ

うに、あるいは自らに対する言い訳にされたのが、「決戦兵力の温存」ということであった。他日の邀撃艦隊決戦に備えて、決戦兵力をうっかり傷つけてはならないという言い訳である。

また三川艦隊が第一次ソロモン海戦で、敵上陸船団に一指も触れず引き揚げたのは、翌朝の空襲を心配したためであるが、永野軍令部総長から「出来るだけ艦を壊さないようにして貰いたい」と言われたことも、心理的に大きく影響していたのである。

戦場は食うか食われるかというところ、そして命が惜しいのが人間の本能、消極的な行動の言い訳となるものは多い。言い訳がまず頭に浮かんだり、言い訳を探している指揮官が、使命を達成するのは難しいであろう。生命尊重第一の今日、犠牲を出さず、少なくとも犠牲を最小限度に押さえることが要求されるのは当然である。一方使命は達成されなければならない。犠牲を出さないのが目的であれば、自衛隊は存在する必要はない。使命の達成が目的であって、生命の尊重はその使命達成に当たり、もっとも考慮すべき要件である。その軽重の判断を誤ってはならない。生命尊重が、使命を達成できない口実にならないよう、よくよく考えるべきであろう。

(注) 南東方面に多くの陸戦隊が投入された。この中には二階級特進された安田義達司令のような立派な指揮官もあったが、上級司令部への意見具申を口実にして、戦線を離脱し、報告後も部隊に帰ろうとしなかった司令もいた。

この攻撃に関連して申しておきたいことの一つは、アウトレンジである。寡を以て衆に勝つ宿命に置かれた日本海軍は、解決策の一つとしてアウトレンジを求めた。18インチ砲、遠距離酸素魚雷、中攻や零戦などの長航続距離などみなこれである。そして訓練では主砲の射程限度に近い大遠距離射撃が重視された。これは最も困難なことを訓練しておけば、外の場合にも適用できる、という考えであった。

しかし遠距離射撃は、これに続く近迫猛撃を前提とするものであって、いくら訓練を積んでも、命中率を大きく上げるには近接するしかないのである。魚雷も伸びた射程を利用して、集団による公算射法を開発したが、実戦で成果を上げた例は、スラバヤ沖海戦で駆逐艦一隻を沈めただけである。近寄らなければ回避自在の敵に必中は期し得ない。零戦の航続距離限度に近いガダルカナルまで、一挙に基地を推進し、敵来攻後も中間基地を設けるのが遅れたのは、大きな作戦ミスであって、多くの搭乗員を失う結果となった。

装備を開発するに当たっては、相手より優れたものを狙い、優れたものが出来れば、これを活用する戦術を研究するのは当然である。しかしアウトレンジが成功するには、複雑巧妙な運動と、精強な術力を必要とするのが通常であって、実戦では、戦場心理も加わって、成果の上がない遠戦に陥り勝ちになる。自分は安全で、相手にだけ被害を負わせる発想は、多くは失敗し、「皮を切らせて肉を

きり、肉を切らせて骨を切る」積極的な心構えのほうが、実戦では成功する。日本海軍がアウトレンジを求めた功罪は、良く研究し、今日の誘導ミサイルの時代に何処まで適用できるか、考えて貰いたい。

日本海軍の攻撃精神が不十分であったこととも関連するが、海軍の追撃は不徹底で、あくまで最大の戦果を挙げるという気迫が十分でなかった。日本海海戦は例外として、日露戦争の蔚山沖海戦や黄海海戦、大東亜戦争のハワイ第二撃、珊瑚海海戦、第一次ソロモン海戦など、みすみす取り逃がした戦果が惜しまれる。

これは、淡泊で、粘りがなく、あっさりした我が国民性と、執拗で、粘り強く、ガメツイ狩猟民族の差が表れたものであるかも知れない。

日常の業務でも、今日やれないわけではないが、期限は明日でよいという場合、とかく明日まで延ばし勝ちになる。しかしそれまでにどんな支障が起こるか判らない。「今日できることは今日すませる」、「戦果を明日に延ばすな」をモットーとし、それが習性となるならば、生涯を通じて得るところは大きく、必要な場合最大の戦果を収めることにも通じるのではなからうか。

次に挙げたいのは年功序列の人事と信賞必罰を欠いたことである。

これはよく知られているので、具体例を一々挙げるのは省略する。ここで私が付言しておきたいのは、社会的慣習の影響である。海軍にせよ、海上自衛隊にせよ、いずれもその時代の日本社会を基盤とし、その強い影響を受けているのであって、これを離れては成立し得ない。日本海軍が年功序列にとらわれ、米海軍のような実績に即した抜擢人事に程遠かったのは事実であり、これを批判するのは易しい。しかしもし思い切った抜擢人事を行い、数クラス後輩の人を上を持ってきたとしたら、果たして全体の融和が保たれ、統率が成り立ったであろうか。答えはNOであろう。人間に自惚れがあり、自負心と嫉妬心をなくし得ない限り、抜擢には限界があり、その許容限度は、その社会の慣行と倫理水準によって決まるであろう。

賞罰も同じである。日本海軍では、論功行賞は公正妥当であることがもっとも重視された。功績調査も中央で一括して行われて、その発表は、戦死者以外は戦後となったため、（支那事変では長期になったため中間で一回発表された）タイミング良く士気を鼓舞することにはならなかった。米軍のように短期間に、且つ現場指揮官にある程度権限を委任して、士気を鼓舞する方式とは、一長一短がある。当時の日本のように、名誉心が社会秩序を維持する一つの基盤であり、それだけに論功行賞に極めて敏感であった（具体例は昨年も話したので省略する）ことを思えば、あのやり方でやむを得なかったのであろう。社会意識も大きく変化した今日、どのようなやり方をとるか、良く検討する必要がある。

必罰は言葉だけで、上になるほど甘かった。大きなミスに対しても、指揮官の交代でお茶を濁し、軍法会議に掛けられるような失敗も予備役編入ですませた。ミッドウエーの敗戦のように、それすら行われなかった例もある。かつての英海



軍のような厳しさが、必ずしも望ましいわけではないが、また一度の失敗で見放すことなく、それを教訓として活かすことを期待した、山本長官の統率にも、大きな利点のあることは否定しないが、とにかく人情に流され勝ちになる日本人の傾向を自戒し、国家国民の安危をになう使命達成を第一に、十分考えてほしい。

次は思想の統一と柔軟性についてである。

日本海軍は思想の統一を強調し、海軍大学校の教育はもとより、度々の訓練を通じて、各級指揮官が同じ思想で行動し、戦闘することを求めた。これは千変万化する戦闘状況の中で、一々上級指揮官から命じられなくとも、その意図に合した行動を各指揮官がとれるようにするためであった。その訓練の積み重ねによって、殆ど一切の命令や指令がなくとも、上級指揮官の意図のとおり、全艦隊が行動し、戦闘する域に達していたのであった。私は昭和15年、前進部隊であり夜戦部隊でもあった第2艦隊の旗艦「高雄」で、航海士として勤務し、狭い艦橋で司令部も一緒であったので、具に司令部の戦闘指導の状況に接した。古賀長官が口を開いたのを見たことはなく、直接戦闘指導に当たった参謀長も、要所要所で簡単な指令を下すだけで、真っ暗な夜間、数十隻の艦隊が、仮想敵主力に対し包囲態勢を取り、一斉に緊迫攻撃を行った状況は、今も瞼の裏に浮かぶ。このように指揮官の意図を中心として、思想は良く統一されていたが、それは邀撃艦隊決戦の場面を中心としていた為、戦争様相の変化に柔軟に対応できなかったのである。開戦時の軍令部第一部長で次いで連合艦隊参謀長になった福留中將は、戦後、真珠湾の攻撃やマレー沖の戦果を聞いても、戦艦が主力であるという自分の考えは、変わらなかった、と述べている。

実際の作戦に当たる部隊は、作戦当初は、平時訓練の成果をよく発揮し、多くの戦果を収めたが、やがて敵がレーダーを活用するようになると、これに追随するのが、困難になった。まして戦争様相の変化を洞察せず、固定的な観念にとらわれた中央や上級司令部の計画や作戦指導が、硬直し失敗したのは当然と言えよう。

作戦実施に際し、考え方が一致していることは、確かに望ましい。しかしそれが、自由な意見の表明を妨げ、発想を制限するようになれば、行き過ぎである。特に科学技術の日進月歩する今日、又国際情勢も戦略情勢も変化の激しい今日、思想の統一よりも重視されるべきは、変わるものあるいは変えなくてはならないものと、変わってはならないもの、あるいは変えるべきでないものとを、見分ける見識と洞察力であり、多様な意見を良く纏め、一つの方向に導く指導力ではなかろうか。そして惰性的な既成観念に囚われず、どのような情勢の変化にも応じうる柔軟性を忘れてはならないであろう。

もう一つ触れておきたいのは、「同じ柳の下に泥鰌は居ない」という戒めである。成功したやり方、うまくいった試みを繰り返して使い勝ちになる傾向は、日

本海軍だけではないかも知れないが、日本海軍は、「馬鹿の一つ覚え」と批判されるほど、成功しなくとも同じやり方を繰り返すことが多かった。最初は奇襲に成功しても、相手は必ず対抗策を講じるものである。三回繰り返した旅順の閉塞もその例であるが、もっともよい例は、ガダルカナルの飛行場に対する高速戦艦を以てする砲撃である。17年10月の「金剛」「榛名」の砲撃は成功し、大きな成果を上げたが、翌月に同じやり方で企図した「比叡」「霧島」の砲撃は、相手に邀撃されて第3次ソロモン海戦となり、砲撃には成功せず、両艦共に失うことになったのである。

航空機の偵察や哨戒、潜水艦の配備や哨戒線の設定なども、そのつど敵情を考え、これに応じるのではなく、またさらに成果を上げる工夫を凝らす態度に乏しく、同じ様な行動を繰り返すことが多かった。所謂前動続行が一般ではなかったか。これが相手に裏をかかれることに通じるのである。この前動続行という言葉のよく使われたことが、漫然と同じ行動を繰り返す日本海軍の体質を示している。

船乗りには「同じ航路も初航海」という言葉のあることは、今更諸君に言う必要はないであろう。これは航海だけでなく、世事一般に通じる戒めであり、特に作戦に当たってはよく噛みしめる必要がある。

最後に最も重要なことの一つを申しておきたい。それは日本海軍にはロジスティクスという観念のなかったことである。もちろん燃料や食糧の補給、艦船や装備の造修、航空機や部品の生産整備、施設整備、輸送などは、極めて重視され、個々の組織も比較的良く整えられて、立派な人材も配されたが、それらを総合して作戦を支援するという考え方はなく、従ってロジスティクスが作戦の成り立つ前提であり、その成否を支配するというところに考えが及ばなかった。

基地航空部隊の作戦にしても、基地の獲得整備は考えても、その後如何にして基地機能を維持し、作戦を継続発展させるかの着意（基地防空、部品や燃料弾薬の補給備蓄、施設の修理復旧、搭乗員の休養交代等）が不十分であった。つまり海軍は航空作戦の総合的検討が十分であったとは言えないのではないか

このロジスティクスの観念がなくこれを重視しなかったことは、自らの作戦に支障を来しただけでなく、敵のロジスティクスを攻撃する着意を欠き大きな不利を招いた。ハワイの第二撃問題、潜水艦の用法、敵輸送部隊の攻撃や後方施設の破壊の軽視、などはその例である。

もし海軍が真剣にロジスティクスに取り組み、さらに国家のロジスティクスを考えたとしたら、果たして開戦に踏み切ることが出来たであろうか

私の話はこれでおしまいであるが、日本海軍を批判する場合注意して欲しいのは、当時国力の乏しいなか、米海軍を仮想敵とする前提のもとで、総て計画し訓練せざるを得なかったこと、また当時の時代思想、社会的倫理や技術水準を背景としたこと、などである。当時の状況を見無視した批判は空理空論となって、教訓

を学ぶことにはならないであろう。

さて最後に諸君に伝えておきたい話がある。それは涅槃経というお経の中にある寓話である。「昔あるところに一人の長者が住んでいた。ある日その長者の家の門口に一人の美しい乙女が姿を現した。その名を聞くと功德天、つまり人々に幸福をもたらす神だという。喜んだ長者は女神を招き入れて供養しようとするが、功德天は自分は妹を連れていたので、一緒に招いて欲しいという。

だが長者の快諾を得て姿を現したのは、二目と見られない醜女であって、しかもその名は暗闇天、つまり人々に災いをもたらす神であった。驚いた長者はこちらの方はお断りだというが、二人は承知しない。私たち二人は姉妹であって、別れ別れになることは出来ない。二人は連れだって歩かねばならない。それではやむを得ないからといって、姉妹連れだって何処へともなく立ち去っていった」

これが寓話であるが、諸君も此の意味するところはお分かりであろう。人間社会には、何事も表と裏がある。両者は矛盾し、いずれかの極端な追求は必ず破綻を来す。両者が仲良く共存し得るようなかねあいを模索し、それを守らなければならないということである。言い換えれば、マイナスを伴わない絶対的プラスというものは存在せず、節度を越え調和を失ったとき、プラスの価値の一途の追求は、ある臨界点を超えて突如として符号を変えるのである。

先程話した日本海軍の攻撃偏重が防御軽視を招いた失敗を思い出して貰いたい。柔軟性と強靱性、積極性と慎重性などすべてそうである。

昔の人の戒めに「仁も過ぎれば弱となる。義も過ぎれば頑となる。礼も過ぎれば諂となる。智も過ぎれば詐となる。信も過ぎれば損となる」というのがある。必ずしも適当とは思われないものもあるが、要するに行き過ぎを戒めたものである。

我々にも昔から同じ様な教えがあった。「中庸は徳の至れるものなり」との教えである。中庸を得ることはそれほど難しい。そして中庸を求めるのが行き過ぎると、自分の特長を殺して、何の取り柄もない人間になってしまう。

そこで我々としては、自分の最善と信じる方法を追求しそれを実行するしかないが、常に行き過ぎていないかとの反省を忘れず、必要な場合は柔軟性を以て修正するという事ではなかろうか。

これで私の話を終わる。外のことは忘れても良いが、「何ノ用ゾ」と「戦果を明日に延ばすな」の二つだけは是非心に留めて貰いたいものである。